

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 17 日現在

機関番号：34316

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2023

課題番号：20K12820

研究課題名（和文）近世・近代日本における真宗私塾のノンフォーマル教育に関する基礎的研究

研究課題名（英文）A Basic Research on Non-Formal Education in Private Academies of Shin Buddhism in Early Modern and Modern Japan

研究代表者

菊川 一道（Kikukawa, Ichido）

龍谷大学・公私立大学の部局等・研究員

研究者番号：10828205

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、真宗私塾の歴史と実態について分析した。黎明期の真宗私塾は、三業惑乱以前に誕生しており、そこでは中央学林の教育システムをモデルに僧侶養成が行われていた。その後、各地に塾が設立されたが、なかでも最大数を擁したのが空華学派であった。同派が最大勢力となりえたのは、門下に課した新学派設立を禁止する「空華塾則」の規定に起因することが明らかとなった。明治以降、本願寺教団が導入した中央集権的な「教校」制度により、各地の塾は一元管理下での統一的な教育が要請された。しかし、実際には一定数の統一カリキュラムを採用しつつも、塾長の個性や専門に基づき、引き続き独自の色のある僧侶養成が行われていた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

近世・近代仏教史研究において、仏教系私塾の歴史と実態を重層的に明らかにする点に、本研究の独自性がある。特に近年活況を呈する近代仏教史研究においては、アカデミズムを牽引した学僧や、権力をもつ教団政治家、有力な在家信徒などの知識層に分析の対象が偏る傾向がある。そうした中、地方私塾を考察した本研究は、空白地帯であった仏教史研究の一部を埋め合わせし、近代仏教史の総体を詳らかにすることに貢献できた。また教育面においては、明治期の学制公布に由来する一元的公教育システムの問題点が指摘されるようになるなか、多様性をもつ私塾情報は、仏教教団の内外を問わず、今後の教育問題を検討する際の参考となりうるだろう。

研究成果の概要（英文）：This study analyzed the history and reality of the private academies of Shin Buddhism. Early private schools were established before the Sango-wakuran, and they trained ministers based on the model of the education system of Gakurin (Central School of Nishi Hongwanji organization in Kyoto). Later, schools were established all over the country, and the Kuge school had the largest number of schools among them. It became clear that the reason this school was able to become the most influential was due to the provisions of the Kuge's original school rules, which prohibited its disciples from founding new schools. After the Meiji period, Nishi Hongwanji introduced a centralized school system, which required all schools in each region to provide a unified education under centralized management. However, in reality, while a certain number of unified curricula were adopted, schools continued to train monks in their own unique way based on the personality and specialty of the school principal.

研究分野：近代仏教、近世仏教、真宗学

キーワード：近世仏教 近代仏教 教育と宗教 私塾 僧侶養成 空華学派 龍華学派 九州真宗

1. 研究開始当初の背景

報告者は「東陽学寮とその実践論の研究」(博士論文、2017年度)において、豊前の真宗私塾・東陽学寮について分析を行った。明治期を代表する真宗学者の一人であった東陽円月が主催した当塾から、学術的・国際的・社会的な僧侶が多数養成された実態について明らかにした。

他方、その分析過程において、近世から近代にかけて真宗私塾が全国各地に100以上存在したことが浮き彫りとなったが、それらは名称が知られるのみで実態はほぼ未検討の状態であった。さらに吉田松陰の松下村塾や広瀬淡窓の咸宜園、緒方洪庵の適塾など、近世・近代日本を代表する私塾を中心に実態解明が進む一方で、私塾経営者の属性として「僧侶」が多かったという報告にも関わらず、仏教系私塾への考察進んでいないという課題があった。そこでその全体像を解明するには、基礎作業として個別の塾のケーススタディを蓄積することが求められると考えたことが、研究開始当初の背景である。

2. 研究の目的

本研究は、①「地域レベルからの近代仏教史の見直し」と②「仏教と教育の関係の見直し」の二つが目的であった。

①「地域レベルからの近代仏教史の見直し」に関して、近代仏教史の全貌は、アカデミズムを牽引した学僧や、権力をもつ教団政治家、有力な在家信徒などの知識層の実態に回収されない、地方の状況も含めて総合的に分析されねばならない。しかしそのようなローカルな視点を有した調査分析は限定的であり、各地の私塾への考察を通して、近代仏教史研究が描写してきた大きな物語を描き直すことを目指した。

また②「仏教と教育の関係の見直し」に関して、仏教系宗門大学が果たしてきた役割に関する研究が進められるなど、中央のフォーマルな教育に関する研究成果に比して、地方のノンフォーマルな教育環境に関する情報は圧倒的に不足している。中央教育機関に学んだ学僧の中には、前後して私塾に学んだものも少なくない。こうした事態を考慮すれば、中央は独立的に存在しえたわけではなく、地方との相互補完的關係によってこそ成立していたと考えなければならぬ。真宗私塾の考察により、地方における僧侶養成の実態を詳らかにすると同時に、中央教育機関における教育システムの基礎部分を可視化させることも目指した。

3. 研究の方法

上記の目的を具体的には以下の研究を実施することによって達成することを目指した。

(1) ノンフォーマルな教育機関としての真宗私塾の実態や特性を明らかにするには、中央のフォーマルな仏教教育機関の基礎情報が不可欠である。そのため、中央学林の発展史および「学則」をはじめとする諸規則の史料蒐集および分析を行う。

(2) 江戸期に創設され、最初期の真宗私塾の一つと考えられる越中の「尺伸堂」に関する史料蒐集および分析を行う。

(3) 近世・近代真宗において最大勢力であった「空華学派」の私塾群に関する調査分析を行う。当該私塾が設置された各地寺院において史料を蒐集し、また関係者に聞き取りも実施する。

(4) 真宗私塾が多く集中する九州を対象に絞り、塾発展のプロセスを明らかにする。なかでも影響力が大きかった博多萬行寺の甘露窟(龍華教校)に関する資料蒐集と分析を行うことで、空華系私塾群とは異なる真宗私塾の多面的な実態を明らかにする。

4. 研究成果

初年度は、真宗私塾に関する史料調査・蒐集・整理を行いつつ、特に①本願寺派の近世学林と「学則」、②尺伸堂に見る真宗私塾の原初形態、といった課題に取り組んだ。

①については、1639年の学林創建以来、学頭を務めた歴代能化が独自の「学則」を示して僧侶養成を行った実態を分析した。特に江戸期に最も依用された第4代能化・日溪法霖の「日溪学則」(1730年)を中心に上げ、当該学則が江戸期はもとより、明治以降も宗学近代化言説と並行して肯定的に引用され続けた実態を明らかにした。これにより、江戸期の学林における僧侶養成の状況が浮き彫りとなったばかりでなく、従来対立的に描写されることの多かった江戸宗

学と近代真宗学が、必ずしも対立関係にあったわけではなく、近代化を後押しする補完的役割を担ったことも詳らかとなった。本内容は日本宗教学会において「近代真宗学」のなかの江戸宗学」と題して発表した。

②については、従来、本願寺派では三業惑乱を契機とする学轍分裂にともない私塾が出現したという見方が大方であったが、惑乱以前に存在した越中の尺伸堂に着目することで、真宗私塾の原初形態を分析した。尺伸堂において用いられた独自の「学則」と、中央学林の「学則」を比較検討することで、当該塾が学林をモデルに地方における僧侶養成を強化しようとした実態について詳らかにした。本内容は真宗連合学会において「学国越中の研究—真宗私塾の原初形態をめぐって」と題して研究発表を行い、同発表に基づく論文は『真宗研究 真宗連合学会研究紀要』（第66輯、2022年）に掲載された。

第二年度は、特に①空華学派に関する言説整理、および②当学派の祖師・僧鎔（1723-1783）とその私塾「空華蘆」の分析を中心に取り組んだ。

①に関して、空華学派が最大勢力となりえた背景に、三業惑乱での勝利、それに伴う多数の勸学職の輩出、さらに多くの門下育成などがあったことが指摘されていた。そこでは同学派が門下の数的優位をもって「主流派」と位置付けられ、同時にその教学の正統性が強調されたことで、主流派から「正統宗学」などと評されるようになった。結果、同学派の権威が飛躍的に向上した実態が浮き彫りとなった。

上記実態を受け、②では同学派が「主流派」や「正統」となりえた背景を、従来の教学を中心とする観点ではなく、彼らの組織運営術に着目することで再考した。他学派に類例を見ない空華学派の勢力拡大が、門下による新学派設立を拒否する「空華蘆塾則」の規定に起因することを明らかにした。以上、①②の成果は日本宗教学会第81回学術大会において「本願寺派における「主流派」の誕生—空華学派とその私塾経営—」と題して発表を行った。また同発表に基づく論文は、『宗教研究』（第96巻別冊、2023年）に掲載された。

第三年度は、特に①近世・近代の本願寺派において最大勢力を誇った空華学派の私塾群の分析を行った。また新たに②博多萬行寺に設置されていた龍華教校（旧甘露窟）の史料調査および分析も行った。

①に関して、奈良県下市の瀧上寺において史料調査を実施した。瀧上寺は空華学派の祖師僧鎔が育てた柔遠と道穩という二人の高弟の流れを汲む学僧が「藤華閣」「華蔵閣」と称される私塾を経営していたことが伝えられるが、その実態は未詳であった。そこで未整理であった同寺の書庫を整理しつつ、特に私塾関連の史料を蒐集した。そこで「空華蘆塾則」が発見されたことにより、同寺の塾が空華学派の所属であったことが同定された。また、同学則が新たに確認されたことで、以前詳らかにした空華学派の新学派設立を禁止する「空華蘆塾則」の方針が実際に地方において機能していた実態も浮き彫りとなった。

②に関して、筑紫女学園大学・人間文化研究所の真宗文化史研究会が行う博多萬行寺の史料調査に同行した。萬行寺には龍華学派の曇龍と、説教の名手として全国的に名を馳せた七里恒順が経営した「甘露窟」や「龍華教校」と称された教育機関が存在したが、その実態は明らかでなかった。新出史料である「曇龍伝」や塾則、入校生名簿等を手がかりに、甘露窟の設立経緯や龍華教校へと改編される経緯などについて分析を行った。

最終年度は、前年度に蒐集した史料のうち、「曇龍伝」や塾則、入校生名簿などの新出史料を手がかりに、塾長であった曇龍の生涯や私塾・甘露窟、さらに後継者である七里恒順の生涯や龍華教校についてより具体的に分析を行った。従来、甘露窟と龍華教校については、未整理のまま混同して論じられていた実態を指摘し、その上で、近代以降に成立した本願寺教団の中央集権的な教育システムである「教校」制度が、甘露窟から龍華教校への変遷過程に決定的な影響を及ぼした実態などを詳らかにした。

また「龍華教校入校生名簿」を整理し、地域別の出身者一覧を作成した。これにより、520名ほどの入校生のうち、約半数が九州外からの遊学者であることが判明した。私塾という名称は周辺地域に対する教育的貢献を想起させるが、著名な塾長などの場合には、全国各地から入門希望者が相次いだことを明らかにした。こうした博多萬行寺にまつわる真宗私塾の内実については、「九州真宗の私塾と龍華教校」と題する論考にまとめ、中川正法、小林 知美、岡村喜史（編）『九州真宗の社会と文化（筑紫女学園大学人間文化研究所叢書3）』（法蔵館、2024年）に掲載・刊行された。

さらに、当該年度においては、大分県日田市教育庁咸宜園教育研究センターと大谷大学同窓会大分支部が共済した企画展「浄土真宗と咸宜園」に際し、真宗私塾と関わりをもつ空華学派の松嶋善讓や、蔵春園（恒遠塾）と西本願寺の関わりなどについて、一部情報提供を行った。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 菊川一道	4. 巻 第96巻別冊
2. 論文標題 本願寺派における「主流派」の誕生 - 空華学派とその私塾経営 -	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 宗教研究	6. 最初と最後の頁 225-226
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 菊川一道	4. 巻 66
2. 論文標題 学国越中の研究 真宗私塾の原初形態をめぐって	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 真宗研究 真宗連合学会研究紀要	6. 最初と最後の頁 172-191
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 菊川一道	4. 巻 第94巻別冊
2. 論文標題 「近代真宗学」のなかの江戸宗学	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 宗教研究	6. 最初と最後の頁 153-154
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 2件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 菊川一道
2. 発表標題 本願寺派における「主流派」の誕生 - 空華学派とその私塾経営 -
3. 学会等名 日本宗教学会 第81回学術大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 菊川一道
2. 発表標題 九州真宗の私塾と教育
3. 学会等名 真宗文化史研究会（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 菊川一道
2. 発表標題 学国越中の研究 真宗私塾の原初形態をめぐって
3. 学会等名 真宗連合学会 第67回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 菊川一道
2. 発表標題 「近代真宗学」のなかの江戸宗学
3. 学会等名 日本宗教学会 第79回学術大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 菊川一道
2. 発表標題 浄土真宗と私塾 豊前の社会派僧侶誕生の舞台裏
3. 学会等名 大分県日田市教育庁成宜園教育センター 令和6年度 公開講座（招待講演）
4. 発表年 2024年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 中川 正法, 小林 知美, 岡村 喜史 (編集)	4. 発行年 2024年
2. 出版社 法蔵館	5. 総ページ数 640
3. 書名 九州真宗の社会と文化 (筑紫女学園大学人間文化研究所叢書)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	富島 信海 (Nobumi Tomishima)	本願寺派総合研究所・研究員	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------